

# 書物の哲学

天 野 雅 郎

ポール・クロードル(※)に『書物の哲学』と題された講演がある。一九二五年に、イタリアのフィレンツェで催された講演であり、その場では同時に、どこやら世界各地から集められた、書物の展覧会も開かれていたらしい。一九二五年は、私たちの国の年号で言えば大正十四年に当たり、この翌年には昭和が、その産声を上げようとしている頃である。

(※) Paul-Louis-Charles Claudel, 1868-1925.

当時、クロードル自身は、一九二二年から足掛け七年、外交官として、駐日フランス大使の任にあったから、この一九二五年の講演は、彼が休暇を取って故国に帰った際、公務の旅行によって、イタリアを訪れた折のものであった。事実、この講演は一人の旅人の目に映った、フィレンツェという「青い都市」の姿を称えることから始まっている。(※)

(※) 以下、基本的に『書物の哲学』からの引用は、三嶋睦子訳(一九八三年、法政大学出版局)に拠る。

しかも、その「青(Bleu)」は、彼がフィレンツェに足を踏み入れた瞬間から、彼の「目を通過して、液体のように」彼の内部に流れ込み、その内部に満ち溢れるほどの「青」であった。——「フィレンツェほど、青い都市はありません。(中略)ここでは、青が、すべてを占め、すべてを一杯に満たしています。人びとは青を飲み、青を呼吸し、青で湯治をしています」。

青い空、青い空気、青い川、青い丘陵……。ただし、クロードルの称えるフィレンツェの「青」は、そのような自然の「青」と並んで、同時に絵画や彫刻や、

あるいは建築の外部(エクステリア)にも内部(インテリア)にも、多彩な形で用いられた、まさしく文化の「青」であって、そのような文化と自然の調和の上に、この「青い都市」は成り立っていた。

と、このように語るクロードルの頭上には、折しも雨が音を立てて、会場の屋根のガラス窓を叩き始めたようである。そして、そのような青い雨の中で、クロードルの話はフィレンツェの修道院から、大聖堂へと引き継がれる。(※) 何故なら、彼にとって書物とは、そのまま建築(architecture)の比喩に託して語られるに、ふさわしいものであったから。

(※) 修道院とは、フィエゾーレ修道院のことであり、大聖堂とは、サンタ・マリア・フィオーレ大聖堂のことである。

ところで、この講演は『書物の哲学(La philosophie du livre)』と、結果的に名付けられているが、この講演の中には一度として「書物の哲学」という言い回しは用いられておらず、それに代わって用いられているのは「書物の生理学(La physiologie du livre)」という表現である。(※) はたして、これは如何なる事態を指し示しているのだろうか。

(※) クロードル自身の「生理学」の表記は、physiologieである。

一般には、これを単なる誤記と見なす立場が有力である。しかし、もともと生理学はギリシア語(physiologia)に端を発し、そのまま訳せば自然学であり、この語は元来、自然(すなわち、生物)の機能の探求を意味していた。その意味に

において、この講演の中でクローデルが、この語の原初的な姿を引き合いに出したとしても、一向に不可解ではない。

しかも、そのような自然学(すなわち、生理学)を、はじめて学問の俎上に乗せ、これを書物という枠の中に収めたのが、他ならぬアリストテレス(「哲学者」)であったことを踏まえれば、(※)むしろ哲学と生理学は一続きの学問であり、そこに矛盾や乖離を見出すのは、私たちの一方的な、きわめて近代的な発想であったことも明らかとなろう。

(※)ヨーロッパ諸語において、いわゆる「哲学者」が大文字で表記される時には、それは他ならぬアリストテレスのことであった。この事実は、この「哲学者」の書物愛に基づく点が大い。

実際、この講演の中でクローデルは、書物が何故、長い年月を経て、現在のよいうな「形」を取るに至ったのか、その理由を考えてみたい、と述べている。言い換えれば、それは葡萄酒の瓶にも比すべき「思想の容器」であり、そこに過去と現在と未来の、あらゆる時間が流れ込み、凝固し、やがて一つの像を刻み出す、さながら「鑄型」のごときものに喩えられる。

また、そのような「形」にクローデルは、人間が連続と、絶え間なく「石」を運び、積み重ね、そこに「人間の説明」のための「壮大な記念碑」を築き上げる様を重ね合わせ、その「壮大な記念碑」を構成する「石」の一つ一つを、そのまま書物の比喻として用いている。ここでも、ふたたび書物は建築との、まさしく親和力を取り戻す。

そもそも建築家(architecte)が、その語源をギリシア語(architecton)に遡り、その名の通りの大工の棟梁であると同時に、そこに世界の立案者、設計者としての神(いわゆる、デミウルゴスとしての神)の姿を二重写しにする存在であったことは、想起こそされて然るべきである。そして、その語の中には同時に、

哲学の始原も隠されていた。

哲学が、これまた古代のギリシアにおいて、万物の根源(arche)の探求に始まり、その出発点において、もともと哲学とは根源学(archeologie)の意味であったことを、私たちは振り返ろう。そうすれば、そのような根源学が哲学(philosophia)の別名であり、それが単なる考古学の枠には収まり切らないものであることも、自ずと明らかになる。

同様に、哲学(と言うよりも、その名の通りの愛知の営み)が、私たちの生の営みに根差し、そこに立ち戻るべきものである限り、そのような生の営みの代表が、いわゆる衣食住の三要素に還元されることは、あらためて強調するまでもない。その限りににおいて、哲学は何よりも「衣」と「食」と、そして「住」(すなわち、建築)の哲学であらざるをえない。

もつとも、そのような哲学の性格は、やがて古代のローマにおいて、哲学が決定的に文字(litera)という媒体(メディア)に結び付き、文字どおりの文学(literatura)となるに及んで、相当な変化を蒙ったことも確かである。(※)すなわち、哲学は広く、人間の読み書き力(リテラシー)の訓練の場となり、ほとんど書物(libri)と不即不離のものとなった。

(※)この変化の背景には、一つには冊子の発明が、一つにはキリスト教の普及が、重要な要因として挙げられる。

けれども、そのことによって哲学が、単に紙(あるいは、羊皮紙)の上に、文字として書き込まれるに過ぎないものになったのか、と言えば、それはクローデルも語るように、むしろ時代錯誤であって、逆に長い間、哲学は私たちに家具や調度や、場合によっては武具や甲冑にも比すべき、堅固な性格を兼ね備えていたことも、忘れられてはならない。

無論、このことは書物の全般に対しても、そのまま当て嵌まることである。私

たちは、いわゆる活版印刷の普及以降、次第に書物が軽量で、便利で、持ち運び可能な状態にあることを、信じて疑わなくなっている。そして、そのような状態を突き詰めた先にあるのが、クロードルに言わせれば、新聞（とりわけ日刊新聞）や、多種多様の雑誌であった。

同様に、そのような新聞や雑誌の傍らには、これらと「ほとんど区別のつかないような本、一度か二度、手にとって、やがて捨てられるか、しわくちゃにされたり、引き裂かれたりするために作られる本、駅の売店で一箱のチョコレートと一緒に買うたぐいのもの」が並んでいる。それらは、ほとんど消耗品に等しい、文字どおりのゴミとなるべき本である。

さらに、その横には「仕事の道具である本、永続的な参考文献、フロクコートを着た会計係や青服を着た労働者のように、有用性というユニフォームの中に押し込められた」本、——例えば「科学、技術、法律の指導書」の類が積み上げられている。しかし、これらの本は悲しいことに、その本性上、長生きをすることの叶わない本である。

結果、このようにして本は、それまで「時の経過による毀損から、書物を守ってくれていた甲冑を脱ぎ捨てて、暫時的な性格を持つ」ようになり、挙句の果てには「脆弱で、しゃれた表紙にはさまれ、そこらの質の悪い紙の部厚い堆積と、白い綴じ糸の集りに過ぎなく」なった。端的に、それは本が「膨大な大衆」の「必需品」になったことの証拠でもある。

しかし、それ以前の本は逆に、それ自体が「すべての器具の中で最も靈的なもの」であり、端的に「知識の道具」であって、それを「一つの箱」や「圧縮された煉瓦」や、場合によっては「いろいろな化石や足跡や憶測に満ちた、炭鉱の種々の成層」に喩えることも可能である。あるいは、それを「感情と情熱の押葉標本 (herbier)」に喩えることも。

実際、クロードルに言わせれば、そもそも「古代のラテン語も現代のラテン語も、共に常に、石の上に書かれるために作られて」きたものであり、そのようなラテン語の上に、ヨーロッパの哲学や文学を始めとする、あらゆる学問が築き上げられているのだとすれば、それは原理的に石の書物によって、花を開いた社会であり、文化であつたらう。

ただし、そのような石の書物には、根本的に一つ、どうしても産み出せないものがある。それは、言うまでもなく「頁(ページ)」である。(※) 現在、私たちの目には当然のごとく、書物に必須の、不可欠のものとして捉えられている「頁」も、実は書物の媒体が、石や粘土や、金属や動物の骨から変化をすることによって、はじめて産み出されたものであつた。

(※) ページ (page) という語自体は、もともとラテン語 (pagina) に遡り、その語義はパピルスの葉を締め付けて、縛つたもの、という意味である。

さらに、そこには巻物からの冊子への、もう一つの大きな、決定的な変化も重なり合っていた。(※) すなわち、冊子が「読者の両手の間で、川のように繰り広げられた巻物に取って代つて以来」、はじめて「頁」は現在の、それ自体が「四角い部分」となり、それは「長さ、を揃えられた行と、欄外の白紙の部分」との関係によって作られることに「なる」。

(※) ギリシア語の本 (biblion) は、それ自体がパピルスの内側 (biblos) を意味しており、原則的に折り畳むことも、表と裏の両面に文字を書くこともできない、要するに巻物の状態にあつた。なお、この語を基にして産み出されたのが、いわゆる「聖書 (Bible)」や「図書館 (Bibliothèque)」である。

この関係を、クロードルは声と、それを取り巻き、支えている、沈黙との関係として語っている。——「この沈黙の中から声は生れ出て、次には逆に、その声が生れ出て、沈黙の中に、磁場のごとくに、なにものかを滲み込ませてゆくのです」。そして、そのような両者の関係を最も如実に、最も忠実に体现しているのが韻文(す

なわち、詩)である。

クローデルの比喻を用いれば、このようにして韻文と、それを「容れる頁との間には、いわば一種の音楽的な関係が存在します。韻文を容れる頁とは、言いかえれば、韻文を私たちに供するための盆であり、ちょうど一つの風景全体を小さな箱の中に閉じ込める、日本の盆栽のようなもので」あり、さらに端的に、それを「楽器」に見立てることも可能である。

このようにして、最初は「青」への賛美から始まった、このクローデルの講演は、今度は次第に「白(Blanche/blanche)」への賛美に引き継がれる。具体的に言えば、それは「頁」の余白の美しさであり、さらに敷衍すれば、それは行間の美しさ、語間の美しさでもあつたらう。そして、このような美しさに敏感であることが、そもそも詩人の資格であらねばならない。

クローデルにとって、そのような詩人の筆頭は、ステファヌ・マラルメであった。あるいは、そこに彼が若い日、多大の影響を受けた、アルチュール・ランポーの名や、この講演の中でも取り上げられている、シャルル・ボードレルの名を付け加えることも許されるであろう。いずれにしても、彼らに共通しているのは、彼らの「白」への愛着である。(※)

(※) マラルメの詩(「骰子一擲」)に対する、クローデルの批評の一文は、はなはだ見事である。——「それは、まるで一片の雪のようであり、飛び去って見えなくなった鳩のあとに残る、一枚の羽毛のようでもあります」。ちなみに、ここにランポーの詩(「母音」)の一節(Aは黒、Eは白、Iは赤、Uは緑、Oは青)を付け加えることも、無益ではあるまい。

もう一度、ここでクローデル自身の言葉に耳を傾けよう。——「白」は「実際には、詩にとって外部から要請される、物質的に必要なものであるだけではありません」。それどころか、むしろ「白」は精神的なものであり、それは詩にとつ

て、逆に内部から要請されるものであり、端的に「詩の存在、詩の生命、詩の呼吸のための条件そのものなのです」。

言い換えれば、詩は「白」という余白を、あるいは「白」という沈黙を、その呼吸(respiration)の条件にしており、そのような呼気(expiration)と吸気(inspiration)の循環によって、はじめて詩という生物の、生と死が決定される。その意味において、詩を語ることは生物の、まさしく機能を語ることに他ならない。すなわち、その生理学を語ることに。

結果、こうしてクローデルの講演は、それが「書物の生理学」と名付けられていようとも、また「書物の哲学」と名付けられていようとも、一向に構わない状態に帰着する。要するに、それは「書物の哲学」でもあり、さらに「書物の生理学」でもあつた、と見なさざるをえない。そして、その結節点には、まさしく書物という生物の存在があつた。

ところで、このような余白(もしくは、沈黙)の詩学という発想は、いつたい何時、何処で、クローデルの着想(インスピレーション)となつて、彼に兆したのであろうか。——おそらく、それは彼が「極東の書物」に喩えて、自分自身の「漂白の人生」とも重ね合わせながら、この講演の中で述べている、はなはだ東洋的な発想ではなかつたらうか。(※)

(※) クローデルが日本への着任以前に、中国(清)の領事館や公使館に勤務していたのは、一八九五年(明治二十八年)から一九〇九年(明治四十二年)の、十四年間である。それは折しも、日清戦争の終結直後から、日本が日露戦争を経て、韓国併合へと突き進む時期であつた。

彼自身の挙げている、具体的な例を引き合いに出せば、それは漢字の「水」と「氷」と「氷」によって、はなはだ印象的な説明が可能となる。すなわち、まず「水」という漢字が「液体の運動を表象する流動的な文字」であるのに対して、



そこに一人の「書家の筆が、その左上に一つの点をつけ加えると、それは「水」という字」に姿を変える。

言い換えれば、それは液体の状態にあった「水」という字が、瞬間に固体としての「氷」に凝り固まる、という事実を指し示している。それどころか、さらに「氷」の、今度は「上」に、点を加えると「氷」、すなわち常住不変、永遠を意味します。このようにして、何よりも運動であったものが、一つの点によって抽象的な永遠性の中に固定されるのです」。

この時、どうやらクロードルの目には、このような漢字の変身（メタモルフォーゼ）が、はなはだ神秘的なものに映ったようである。——「漢字の中で、この点がある、このように言外の意味を含まないものではありません」。それは「ちょうど、一枚の散りゆく木の葉が、池の水面を揺らし、そこに影を映している世界全体を揺り動かすのとおなじです」。

と言って、クロードルは「ごく最近、日本で作った」詩の一節を、厳かに披露する。それは、ただ一枚の木の葉（「柳の葉」）の周囲に池が広がり、その池の上には満天の星が瞬き、その空の下には「大地」と「王侯たちの宮殿」と、そして廃墟が、静かに眠り、その「世界全体」が「端から端まで、うちふるえ、おののき始める」光景であった……。

さて、このようにして本稿が、ポール・クロードルの講演を引き合いに出すことから始まったのには、理由がある。それは、昨年（二〇一〇年）の九月四日、私も彼の顰（ひそみ）に倣い、私の「書物の哲学」を披露する、講演の機会に恵まれたからである。会場は、和歌山大学の「地域連携・生涯学習センター」の二階ホールであった。

このホールでは、すでに十年以上に亘り、毎月、第一土曜日に「土曜講座」と題する講座が開かれおり、その講座に、私も今回、招かれることになった次第である。今回は全体のテーマに「共に生きる——人の生き方・社会のあり方——」が掲げられ、その内の前期が「本からひろがる世界」と題され、後期が「持続可能な社会を創る」と題されていた。

私が引き受けたのは、その内の前期の第六回（要するに、最終回）であり、一応、講演題目には「読書、あるいは『臨死』の体験」という名を付しておいた。もともと、私の場合には講演をする際にも、文章を書く際にも、差し当り題目は御題目であって、それを唱えはしても、本当に実行に移すことができるのかどうかは、保証の限りではない。

強いて言えば、今回の講演題目の伏線には、上記の全体のテーマ（「共に生きる」）への、私なりの応答があり、その応答（response）を実際に、現実のものとするのが私の、文字どおりの責任（responsibility）である、という程度の意思表示であった。言い換えれば、そもそも「共に生きる」ことは、私たちが「共に死ぬ」ことを抜きにして、成り立つのであろうか。

単純な話、人が「生きる」ことは、人が「死ぬ」ことであり、そのような生き出しの生と死の上に、さまざまな覆いや装いを凝らすことによって、人の生（すなわち、生活や人生）は織り上げられている。私たちが、一般に社会や文化という名で呼んでいる、あらゆる人間の活動と、その所産は、このような生と死のカムフラージュに他ならない。

それならば、そのようなカムフラージュの一形態として、いわゆる本（すなわち、書物）は存在しているのであろうか。——なるほど、本が私たちの文化であり、その文化によって、私たちの社会が組み立てられているのだとすれば、本は何らかの形で、私たちが生と死の現実から目を逸らし、そこに覆いや装いを凝ら

すものである、と評さざるをえない。

けれども、それと並んで本が、逆に私たちに剥き出しの、生と死の現実を突き付けるものであることも否めない。何しろ、本は私たちとは異なり、その場所(すなわち、その本の置かれている地点)から、一步も歩き出そうとはしないからである。要するに、本は決して動物(アニマル)ではなく、そこに原理的に、何らの生命(アニマ)も宿っていない。

と、このように言えば、ただちに私たちは意外な、異様な不安感に苛まれざるをえないであろう。何故なら、そのようにして魂の無い、死んだものであるはずの本が、ふとした瞬間に、ふとした契機で、まるで私たちには生きているものであるかのように、それどころか、生きているもの以上に、生きているものであるかのように、感じ取られるからである。

しかも、そのような瞬間は皮肉なことに、私たちが本を手に取り、読んでいる間よりも、むしろ私たちが本を読み終えて、本から手を離し、その本との間に、ある種の距離感が生じた時に飛来する。それは、本が本来の、死んだものとしての性格、要するに、物体や物質としての性格、まさしく「もの」としての性格を、取り戻した瞬間である。

今回の講演では、そのような私の、かなり個人的な本との付き合いを、あえて明示的ではなく、暗示的に語った積りである。以下に掲載するのは、今回の講演に際して書き留めた、一連の原稿の集積である。順次、当日の講師紹介のプロフィールから始まって、今回の講演のために準備した、折々の文章を並べておいた。ご参照を願えれば幸いである。

## ■プロフィール

昭和三十年 (一九五五年) 島根県松江市に生まれる。  
昭和五十六年 (一九八一年) 広島大学総合科学部助手となる。  
平成三年 (一九九一年) 和歌山大学教育学部助教授となる。  
平成十七年 (二〇〇五年) 同教授となり、現在に至る。

和歌山大学に赴任して、ちょうど二十年になります。現在は市内の某所に寓居を構えています。この家を建てるためには、まず数十箇所の土地を見て歩き、やっと見付けた(と言うよりも、出会った)場所に、今度は自分で設計図(の真似事)を描き、インテリアからエクステリアまで、あらゆる面に意匠を凝らし、また。その中でも、とりわけ拘泥したのが図書室で、これは我が家の一階部分と、三階部分の中心を占めています。

前者が、いわゆる「天野図書館」と(和歌山大学の、ごく一部の学生に)呼ばれている場所であり、この場所に置いてある本は、基本的に当面、僕が使用していない本ですので、借りたい人には無償で貸し出しています。後者は、これに対して「立ち入り禁止」の区域で、僕以外には誰も、女房や子供であろうとも、いっさい本を手を取ることは許されていません。——と、大袈裟に言えば、このような家を建てて、僕は暮らしています。

今回の講座では、そのような僕の日常も含めて、本と人との根源的な(すなわち、哲学的な)繋がり的一端を、お話することができれば、と考えています。例えば、人にとって本とは何か、また人は、なぜ読書という営みを繰り返し、今に至るのか、といった話です。一応、講座ですので、面倒臭い話も差し挟みはしますが、要は砕けた、ざっくばらんな話だと思って、ブラブラと周囲の散策がてらに、お越し下さい。

## ■前口上(プレリユード)

暦の上では、もう処暑を過ぎていても拘らず、相変わらず「暑い！暑い！」の連呼が口を衝いて、止まりません。——「困ったなあ、土曜講座の原稿を書かなくては……」と焦るのですが、なかなか筆を執る気が起きず、グズグズと時は滞り、過ぎてしまいました。毎晩、九時頃には眠り、毎朝、三時頃には目を覚ます生活を営んでおりますと、夜明け前の涼しい、静かな仕事の時間が確保できないのは、ほんと弱り果ててしまいます。

それでも、刻々と締め切りの日時は近づいて参りました。悠長に構えている暇も無くなりましたので、今日は幾分、過ごし易くなったのを幸いに、夜明け前から机に向かい、せっせとパソコンのキーボードを叩いています。情け無い話ではありますが、この数年来、愛用の万年筆(極太)を握り、所定の原稿用紙(二百字詰、縦書)に向かう機会が減ってしまい、もっぱら不人情な、無愛想な機械(マシン)との付き合いを余儀なくされています。

私たちが、ただ自分の手と筆記用具を使って、目の前の紙に文字を書く、それだけの行為が神聖な、厳粛な作業であった時代があります。そのような時代に、本は生まれ、育ちました。おそらく、今でも私たちが本に対して抱いている、ある種の愛着の根源には、そのような古い、紙と筆の文化が残されているのではないのでしょうか？ それならば、そのような文化を私たちは、現在、数多(あまた)の悔恨と慙愧を込めて、振り返らねばなりません。

さて、今回の講座は「本からひろがる世界」と名付けられています。なかなか魅力的で、啓発的なネーミングです。——けれども、よく考えてみると、いったい「本からひろがる世界」とは、どのような世界なのでしょう？ どこに、ど

のような形で、そのような世界は広がっており、また、拡がっていくのでしょうか？ 分かるようでいて、よく分からない表現です。何しろ、本を読んでも、読まなくても、そこに世界は存在していますから。

例えば、我が家では現在、ほぼ一年に一千冊以上の割合で、本が増え続けています。言い換えれば、毎月百冊程度の本が、我が家では所狭しと、繁殖と増殖を繰り返しています。(ちなみに、ほとんどの本は新刊ではなく、文字どおりの古本ですが……) そのような状態を、はたして「本からひろがる世界」と呼ぶことは可能なのでしょうか？ 少なくとも、そのような呼び名に対して、僕個人は、苦笑と失笑を催さざるをえません。

しかも、そのような状態を身近に、ヒシヒシと感じている、我が家の女房と子供の側に言わせれば、それは本から「ひろがる」世界ではなくて、むしろ本から「せばまる」(あるいは「ちぢまる」)世界だと、声を揃えて捲(まく)し立てることでしょう。要するに、本とは何よりも、その一冊一冊が、ある特定の場所を占める「物体」(すなわち「もの」)であることに、私たちは気付かなくてはなりませんし、気付かざるをえません。

その意味において、まず本は「読む」ものである、という常識(すなわち、思い込み)から、私たちは自由になる必要があるのではないのでしょうか？ 少なくとも、僕自身の目には、まず本が「読む」ものではなく、まず「在る」ものとして、映ります。何しろ、僕自身は本を、自分の興味や、当座の関心に即して、買い求めはしませんので。——さもなければ、そもそも我が家の本の大半は、まさしく「無用の長物」に過ぎません。

元来、本(ホン)とは木の根に、ある種の印(・やー)を付けて、その部分を指し示す漢字(すなわち、漢語)でした。日本語(すなわち、和語)では、これをもとと呼びます。やがて、この語が書物のことを意味するようになったのは、

もともと書物が草や木の化身(いわゆる、メタモルフォーゼ)であったからに他なりません。本とは、その成り立ちにおいて、木であり、草であり、要するに、それは植物の変じた姿、転じた姿です。

皆さんは、例えば真夜中の図書館を、ご存知でしょうか？ 一般に、図書館には開館時間と閉館時間があり、その時間帯に合わせて、私たちは図書館と付き合うことを許されています。多少の時差はあっても、図書館に勤めている人も例外ではありません。(唯一の例外は、警備員の人か、さもなければ泥棒でしょう。)しかし、そこに私たちが居合わせていても、いなくても、いつも図書館は存在していますし、そこに本は、確実に存在しています。

例えば、真夜中の森の中で皆さんが、黙って座って、静かに周囲の闇に目を凝らしている、そのような姿を想像して下さい。すると、そこには多くの物音が、徐々に聞こえて来るはずで、虫や鳥や獣の音が聞こえて来るかも知れません。あるいは、草や木が風に戦(そよ)いで、ザワザワと揺れている音が聞こえて来るかも知れません。譬えて言えば、真夜中の図書館とは、そのような森の中のいきづきとざわめきに似ています。

時折、僕は真夜中の図書館(いわゆる「天野図書館」)に座って、じっと一人で、本を眺めます。——実際、眺めるのであって、読むではありません。何しろ、本とは私たちに読まれるよりも、むしろ眺められることによって、ずっと雄弁になりうる存在ですから。しかも、そのような本は遠い昔の、遙かな場所の、もう今は生きていない、すでに死んでしまった人の書き残した、思考の痕跡であることが通常です。

そのような時、僕は一番、本との落ち着いた、ゆるやかな繋がりを感じます。いつも本が、私たちに読まれる、裏を返せば、いつも私たちが本を読む、そのような縛り、から解き放たれて、ただ本が本として、そこに静かに並んでいる、その

ような光景が僕は好きです。そう言えば、確か今回の講座のパンフレットにも、十七世紀のフランス人の名前が載っていました。その人は、実は僕が学生の頃、卒業論文に選んだ哲学者です。

——と言う訳で、当日はパスカルの『パンセ』の話題から、講座を始めます。『パンセ』というフランス語(Pensée)は、そのまま訳せば「考え」です。小難しく言えば、思考や思索や思想となりますが、いずれにしても、そこには私たちの「考える」(penser)という営みが前提になっています。私たちは、はたして普段、この「考える」という営みに携わっているのでしょうか？ どうも僕には、まったく逆の点が目に付いて、困っています。

#### ■講演原稿(前半)

はじめまして。和歌山大学(教育学部)の天野です。本日は、お招きをいただき、ありがとうございます。短い間ですが、よろしく、お付き合い下さい。予定では、まず前半に五十分の話をして、それから十分の休憩を取り、後半にも五十分の話をして、最後に質疑応答が十分、というスケジュールになっています。全部で、合わせて二時間の講座です。

一応、予定の時刻を守る積りではありますが、何分、予定どおりに行動するのが嫌いな性分ですので、どうなりますことやら。それと、かなり短い時間の話になりますので、おそらく喋りたいことの何分の一(それどころか、何十分の一)も喋れないであろう、と覚悟を決めて、皆さんの手許には本日の話の内容を、あらかじめ「前口上」という形で、お渡ししておきました。

また、話は出来るだけ簡単な中身にしようにと、釘を刺されています。ほぼ百人前後の受講者の内、七割程度が六十歳以上である、という理由からのように



す。でも、これは考えたら、あまり釈然としない理由です。逆に言うと、六十歳以下には難しい話をして構わない、という結果になるのでしょうか？ それならば、僕の大学での授業も、実に楽なのですが……。

この場には、高校生も若干名、顔を出していらっしやいますので、あえて申し上げませんが、最近、難しい話をする、聞いてくれないのは、むしろ若者の方ではないでしょうか？ 例えば、昨今の大学生に授業中、難しい話するのは御法度で、たちまち居眠りを始めたり、お喋りに精を出したり、机の下で携帯電話を弄ったり、取り付く島がありません。

その点、いわゆる「お年寄り」の方が、けっこう難しい話でも、耳を傾けて下さいますし、居眠り（「死語」）などをなさる方は、はなはだ少数です。さぞかし頑張つて、睡魔と闘っていらっしやるのかも知れませんが、例えば大学でも、一般に開放されている授業を行ないますと、熱心に休まず、最前列の席に座つて、こちらの話を聴いて下さるのは高齢者です。

大学だけの話では、ありません。例えば、僕は月に二回、第一土曜日と第三土曜日に、日本の古典文学の講読会を開いています。実は、今日も九月の第一土曜日ですので、その内の一つの会を休んで、この場に遣つて来ています。そして、そのような会において、僕は大学の授業よりも、はるかに楽しい、有意義な時間を過ごしている、と感じています。何故なら、そのような会では大学の授業よりも、はるかに熱心な参加者に出会えますから。

ちなみに、第一土曜日の方は「和歌浦万葉塾」と言つて、和歌浦に在住の、ご婦人方を中心にして、昨年の春から始まつた会です。会員は、僕を含めて十五名程度ですが、毎回、皆さんの熱心な参加をいただいて、名前どおりに『万葉集』の講読を続けています。全員、とても初々しい、純真な少女のような方ばかりですが、平均年齢は七十歳代の半ばでしょう。

一方、第三土曜日の方は「万葉わかな会」と言つて、もともと和歌山大学の名

誉教授で、二年前に亡くなられた、多田道夫さんが始められた会です。残念ながら、僕には直接、多田道夫さんとの面識がありませんが、巡り廻つて、この会を僕が引き継ぎ、十年ばかり前から運営しています。会員は、こちらも全部で十五名程度ですが、これまた女性会員のみです。

年齢も、おそらく「和歌浦万葉塾」の方とドッコイドッコイ(?)でしょう。それでも、この「万葉わかな会」では『万葉集』と『古今和歌集』の講読を終えて後、現在は『新古今和歌集』を読み進めています。ご本人たちは「冥土の土産に……」と笑つていらっしやいますが、その好奇心は甚だ旺盛で、とうてい近々に、冥土に旅立たれる気配はありません。

和歌山大学に赴任して、僕自身も二十年が経ちますが、いちばん和歌山という場所の（お世辞ではなく）文化程度を感じますのは、このような人々の中に息づいている、きわめて日常的な教養の高さです。——ちなみに、たまたま出掛けたスナックの店内で、突然、お客さんたちの楽器演奏が始まり、粋な歌が流れ出す瞬間も、そのような教養の一つでしょうか。

数年前に結婚をして、その筋には、すっかり疎くなりましたが、日本人の伝統的な教養には、大きく分ければ二種類あつて、それは詩歌と管弦に分かれます。詩歌は詩と歌ですから、これは漢詩と和歌のことで、管弦は言うまでもなく、管楽器と弦楽器です。現代風に言えば、中国（ひいては、外国）文学と日本文学とバンド演奏(?)と言ふことになるでしょう。

皆さんは、例えば「三舟（もしくは、三船）の才」という語を、ご存知でしょうか？ この語は、その名の通りに三艘の舟（詩の舟、歌の舟、管弦の舟）に乗つて、平安時代の貴族が彼らの才、要するに、彼らの教養を競い合った、一千年前の故事に由来しています。そして、その「三舟の才」を地で行つて、類まれな能力を発揮したのが、藤原公任(※)でした。

(※) 藤原公任、康保三年(九六六)―長久二年(一〇四二)。

藤原公任と言えば、皆さんも『和漢朗詠集』(※)の撰者としての、彼の功績を想い起こされるはずだ。この本は、もともと彼が愛娘の結婚に際して、その相手(婿)に贈った引出物で、まさしく和(すなわち、日本)と、それから漢(すなわち、中国)の粹を集めて、それぞれの代表的な詩人と歌人で編んだ、いわゆる詞華集(アンソロジー)に他なりません。

(※)『和漢朗詠集』は、現在、講談社学術文庫版(一九八二年)か、新潮日本古典集成版(一九八三年)で繙くのが、いちばん簡便であろう。前者は、川口久雄の訳注で、後者は、大曾根章介と堀内秀晃の校注である。

この本では、前半が「春」から「冬」へと、後半が「風」から「白」へと、その主題が引き継がれています。言い換えれば、この本には私たちの生きている、この世界全体が、時には自然の形を取って、時には人間の形を取って、お互いに共鳴し、交響している姿が描き出されています。——それが長い間、この本を、日本人の教養の「お手本」にした理由です。

このような「お手本」は、遡れば『古今和歌集』に辿り着きます。そして、そこには自然が、春夏秋冬(いわゆる、四季)の姿をして、人間を取り巻き、その中で人間も、同時に四季に応じた、それぞれの季節に相応しい、出会いと別れを繰り返します。それが、一口で言えば、日本語の恋(こひ)孤悲(こび)という語の、端的な意味に他なりません。

ところで、いささか話は飛びますが、かつて日本人で最初に「ノーベル文学賞」を受賞した、小説家の川端康成(※)が、その受賞記念講演(『美しい日本の私』)の中で語ったのも、このような日本人の教養の原点でした。それどころか、それを彼は「日本の真髄」とすら呼んでいます。彼の挙げている、選り抜きの名歌を二首、引いておきましょう。

(※)川端康成、明治三十二年(一八九九)―昭和四十七年(一九七二)。なお、川端康成の『美しい日本の私』は、副題に「その序説」とあって、エドワード・G・サイデンステッカ

―の英訳と共に、講談社現代新書(一九六九年)に収められている。

春は花 夏ほととぎす 秋は月 冬雪さえて 冷(すず)しかりけり  
形見とて 何か残さん 春は花 山ほととぎす 秋はもみぢ葉

それぞれ、道元と良寛の歌です。これらの歌を、川端康成は「ありきたりの事柄とありふれた言葉を、ためらひもなく、と言ふよりも、ことさらとめて、連ねて重ねるうちに、日本の真髄を伝へた」歌である、と評しています。言い換えれば、その「月並み、常套、平凡、この上ない」歌の中にこそ、日本人の教養の原点は宿っています。

すなわち、私たちは誰しも、春(青春)に生まれ、夏(朱夏)を迎え、秋(白秋)を経て、冬(玄冬)に至ります。そして、その自然の周期(サイクル)の中で、私たちは春(はる)晴・張・壘・発)を知り、夏(なつ)暑・熱)を知り、秋(あき)飽)を知り、やがて冬(ふゆ)冷・殖)を知ることになるでしょう。——それが、私たちの教養の到達点です。

さて、前置きが随分、長くなりました。今回の講座のテーマは「本からひろがる世界」と題されています。しかし、それは私たちが本を読むことで、この世界のどこかに、例えば外国のどこかに、この国のどこかに、私たちの知らない世界があつて、その世界が本を読むことで、はじめて私たちの中に「ひろがる」という、そのような意味なのでしょう。

なるほど、そんなのかも知れませんが、けれども、それならば別段、私たちは本を読まなくても、新聞や雑誌であつても、TVや映画であつても、あるいは実際に、そのような知らない世界に出掛けて行くことによって、そのまま世界は「ひろがる」のではないのでしょうか? 少なくとも、そのような形で「ひろがる」世界の方が、ずっと便利で、容易な気が致します。

個人的な話ではありませんが、例えば僕は、もう十日ほどすると、中国に旅行に出掛けることになっています。最初の訪中です。さぞかし新しい、多くの出来事が僕を待ち受けていることでしょう。しかし、それは僕の中に、これまで経験したことのない世界が「ひろがる」ことではあっても、それが簡単に、僕自身の世界が「ひろがる」ことに繋がるのでしょうか？

残念ながら、違う、と僕は感じています。そろそろ、前半も終了の時刻です。最後に僕の好きな、夏目漱石(※)の『三四郎』を読んで、後半に話を繋ぎましょう。夏目漱石を引用する理由は、後半で明らかになります。箇所は主人公(小川三四郎)が、はじめて汽車に乗り、郷里の熊本から東京へと向かい、その車中で、謎の「髭の男」と出会う場面です。

(※) 夏目漱石、慶応三年(一八六七)―大正五年(一九一六)。なお、今回は便宜上、基本的に『三四郎』からの引用は、岩波文庫(一九九〇年改版)に拠った。いわゆる仮名遣いの新旧を始めとして、個人的に不満な点も残るが、ご容赦を願いたい。ちなみに、振り仮名は一切、省略してある。この点も、ご寛恕を乞う。

……すると髭の男は、

「御互は憐れだなあ」といい出した。「こんな顔をして、こんなに弱っているでは、いくら日露戦争に勝って、一等国になっても駄目ですね。尤も建物を見ても、庭園を見ても、いずれも顔相応の所だが、――あなたは東京が始めてなら、まだ富士山を見た事がないでしょう。今に見えるから御覧なさい。あれが日本一の名物だ。あれより外に自慢するものは何もない。ところがその富士山は天然自然に昔からあったものなんだから仕方がない。我々が拵えたものじゃない」といつてまたにやにや笑っている。三四郎は日露戦争以後こんな人間に出逢うとは思っても寄らなかつた。どうも日本人じゃないような気がする。

「しかしこれからは日本も段々発展するでしょう」と弁護した。すると、か

の男は、すましたもので、

「亡びるね」といった。――熊本でこんなことを口に出せば、すぐ擲ぐられる。わるくすると国賊取扱にされる。三四郎は頭の中のどここの隅にもこういう思想を入れる余裕はないような空気の裡で生長した。だからことによると自分の年齢の若いのに乗じて、他を愚弄するのではなからうかとも考えた。男は例の如くにやにや笑っている。そのくせ言葉つきはどこまでも落付いている。どうも見当が付かないから、相手になるのをやめて黙ってしまった。すると男が、こういった。

「熊本より東京は広い。東京より日本は広い。日本より……」でちょっと切ったが、三四郎の顔を見ると耳を傾けている。

「日本より頭の方が広いでしょう」といった。「囚われちゃ駄目だ。いくら日本のためを思ったって鼻根の引倒しになるばかりだ」

この言葉を聞いた時、三四郎は真実に熊本を出たような心持がした。同時に熊本にいた時の自分は卑怯であったと悟った。

#### ■講演原稿(後半)

さて、後半の話を始めます。後半は、もっぱら僕自身の話をしよう、と思っ  
ています。例えば、僕が現在、住んでいる家の話や、その家の中に、いわゆる「天  
野図書館」を作り、借りたい人には無償で本を貸し出している、という話です。  
けれども、その前に予告どおり、パスカルの話を済ませておかなければなりませ  
ん。パンフレット(※)を、ご覧ください。

(※) パンフレットの文面は、以下の通りである。――かつてフランスの哲学者パスカル  
はこう言いました。「人間は自然のうちで最も弱い一茎の葦に過ぎない。しかしそれ  
は考える葦である。」(河出書房新社「世界の大思想 8『パンセ』」松浪信三郎訳)と。一

茎の葦も、重ね合わせると強くしなやかな力を生み出します。一冊の本との出会いは、知恵の布を織りなし心豊かな人生へと誘います。混沌とした時代の今こそ、知の泉である本の魅力を再発見し、平和で持続可能な社会をめざして、他者と共に生きる意味を考えてみませんか。

パスカル(※)は、僕が学生時代に卒業論文の対象に選んだ人です。その分、個人的な思い入れも強く、例えばパスカルや『パンセ』の文字を目に致しますと、すぐ敏感に反応してしまいます。今回は、たまたまパンフレットの表紙にパスカルと「考える葦」の一節を見つけました。どなたが、お書きになったのか、僕は知りませんので、悪しからず。

(※) Blaise Pascal, 1623-1662.

悪しからず、と申し上げましたのは、このパスカルの文章が、はなはだ恣意的な、はつきり言えば、間違った引用であるからです。——何が、間違っているのでしょうか？ 論より証拠、ここに『パンセ』を持参しましたので、該当箇所を開いて、読んでみましょう。(※) 断片番号は、この本(いわゆる、ブランシュビック版)では、三四七番に当たります。

(※) 引用は、前田陽一・由木康訳(一九七三年、中公文庫)に拠る。

人間はひとくきの葦にすぎない。自然のなかで最も弱いものである。だが、それは考える葦である。彼をおしつぶすために、宇宙全体が武装するには及ばない。蒸気や一滴の水でも彼を殺すのに十分である。だが、たとい宇宙が彼をおしつぶしても、人間は彼を殺すものより尊いだろう。なぜなら、彼は自分が死ぬことと、宇宙の自分に対する優勢とを知っているからである。宇宙は何も知らない。(改行)だから、われわれの尊厳のすべては、考えることのなかにある。われわれはそこから立ち上がらなければならないのであって、われわれが

満たすことのできない空間や時間からではない。だから、よく考えることに努めよう。ここに道徳の原理がある。

お分かりになりましたでしょうか？ たしかにパスカルは、この一節を『パンセ』の断片として書き残しています。けれども、それは人間(「考える葦」)が、一人では「弱いもの(それどころか、最も弱いもの)」でありながら、その弱さを「重ね合わせると」、そこから「強くしなやかな力」が産み出される、と言っているのでしょうか？——そうでは、ありません。

パスカルが言っているのは、むしろ人間の弱さは根源的、絶対的な弱さであって、条件が変われば、その弱さが強さに転じるような、そのような弱さでは決してない、という事実です。あるいは、パスカルは人間の弱さを、決して強さとの対比において語ってはいない、と言い換えても結構です。人間は、ただ弱く、ひたすら弱い存在であらねばなりません。

なぜなら、そのことによって逆に、人間には人間の、固有の尊厳が生まれるからです。この語を、原文のフランス語では *dignité* と言っています。英語で言えば *dignity* で、品位や気品と訳すことも可能です。いずれにしても、それは人間の品(ヒン)を指し示す語です。要するに、パスカルが語っているのは人間の、いわゆる人品(もしくは、人格)の問題です。

パスカルは、そのような人間の尊厳が、人間の思考の中に存在する、と言っています。「だから、よく考えることを努めよう。ここに道徳(*morale*)の原理がある」とも。なお、この道徳は英語でも、そのままモラル(*moral*)となりますが、一方の思考は *thinking* や *thought* となり、これはフランス語では *pensée* と言います。この本の表題の『パンセ』です。

要するに、パスカルの『パンセ』は人間の、このような尊厳と思考と道徳の、文字どおりに三位一体を、まだ若い彼が、それにも拘らず、三十九歳で死んでし



まった彼が、私たちに向かって書き残した、さながら遺書のごとき本に他なりません。なお、遺書は英語で言えば *will* (すなわち、意志) となりますが、日本語では、いわゆる辞世がピッタリと来ます。

僕自身は、かつて若い日にパスカルの『パンセ』と出会い、当時は、この本の真意が理解できず、かなり拙い卒業論文しか書くことができませんでした。それでも、その頃の生活と、様々な人間関係を振り返り、今でも懐かしく、この本のページを捲ることを繰り返しています。—— 本日は、その頃に僕の読んだ本の中から、皆さんに一冊の本を紹介させて下さい。

それは、僕が学生時代に、それどころか、おそらく今に至るまで、いちばん多くの時間を費やして読んだ本で、書名は『バビロンの流れのほとりにて』です。著者は森有正(※)で、お祖父さんが明治時代の政治家、初代文部大臣の森有礼です。森有礼は、最期は非業の死を遂げました。お父さんは、大正時代のキリスト者で、プロテスタント教会の牧師の森明です。

(※) 森有正、明治四十四年(一九一〇)―昭和五十一年(一九七六)。

森有正は、ちょうど僕が学生時代に、パリで客死しました。彼が東京大学の助教授の頃、フランスへと留学し、困ったことに、そのまま日本へは帰らず、仕事も投げ出し、家族も放り出し、ひたすら旅の空の下で、遙かなノートル・ダムを見遣りながら、孤独な思索を重ねる姿には、当時の若い、中途半端な哲学志望の学生にも、強烈な印象が残りました。

僕自身が、結果的に卒業論文にパスカルの『パンセ』を選んだのも、それは他ならぬ、森有正の影響であり、彼の卒業論文のタイトル(『パスカル研究』)と同じ題目の卒業論文を、僕も書きたい、という願いからでした。当時は、まだ学生が勝手に、自分の卒業論文のテーマを選んだり、題目を決めたりすることの許されない、封建的な雰囲気の中での選択です。

ここに、その頃の僕が読んでいた、古い『バビロンの流れのほとりにて』を持

参していますので、その冒頭の部分を開いて、ちょっと読んでみます。(※) 先日、この講座の準備で、この本を久し振りに本棚から引っ張り出し、函から取り出して、その余りの汚さに呆れ返りました。それでも、もう今の僕には、ここまですぐ本を読む情熱は残されていませんが……。

(※) 引用は、一九六八年版(筑摩書房)に拠る。

ちなみに、この本は本来、とても美しい装丁の本でした。ひよっとすると、僕自身が本の装丁の美しさに気付いたのも、この本が最初であったのかも知れませんが、ご存知の方も多いでしょうが、この本の装丁を担当したのが、森有正の晩年の恋人で、製本家の柄折久美子さんです。彼女は、私たちの国では珍しい、国際製本協会の「マイスター」です。

なお、彼女には森有正との個人的な出会いから、別れまでを綴った、鎮魂の哀歌(レクイエム)も出版されています。二〇〇三年の出版ですから、まだ新しい本です。ここに、その本(『森有正先生のこと』)も持参してきましたが、この本のカバーを捲ると、そこには『バビロンの流れのほとりにて』に似た、ちょっと控え目な、美しい紺と白の、装丁が姿を現します。

一つの生涯というものは、その過程を営む、生命の稚い日に、すでに、その本質において、残るところなく、露われているのではないだろうか。僕は現在を反省し、また幼年時代を回顧するとき、そう信ぜざるをえない。この確からしい事柄は、悲痛であると同時に、限りなく慰めに充ちている。君はこのことをどう考えるだろうか。ヨーロッパの精神が、その行き尽くしたはてに、いつもそこに立ちかえる、ギリシアの神話や旧約聖書の中では、神殿の巫女たちや予言者たちが、将来栄光をうけたり、悲劇的な運命を辿ったりする人々について、予言をしていることを君も知っていることと思う。稚い生命の中に、ある本質的な意味で、すでにその人の生涯全部が含まれ、さらに顕われてさえている

のでないとしたら、どうしてこういうことが可能だったのだろうか。またそれが古い記録を綴った人々の心を惹いたのだろうか。社会における地位やそれを支配する掟、それらへの不可避の配慮、家庭、恋愛、交友、それらから醸し出される曲折した経緯、そのほか様々なことで、この運命は覆われている。しかしそのことはやがて、秘かに、あるいは明らかに、露われざるをえないだろう。そして人はその人自身の死を死ぬことができるだろう。またその時、人は死を恐れない。

さて、そろそろ幕引きの時間も近づいて参りました。本日、僕が皆さんに申し上げたかったことは、すでに「前口上」という形で、そのあらまは述べてありますし、今は森有正の言葉を借りて、先程はパスカルの『パンセ』の言葉を借りて、そのおおよそは語り終えました。最後に、それを一言で纏めれば、人は自身自身の死を死ぬ、と行うことになるでしょう。

そして、それを裏返せば、人は自分自身の生を生きる、と行うことになるでしょう。人にとって、もし読書が必要な、不可欠なものであるならば、それは読書が、そのような人の生と死を、私たちに教えてくれるものであるからに他なりません。逆に言えば、そのような人の生と死を、私たちに教えてくれるものであれば、それは別段、読書であるには及びません。

僕自身は、現在は「天野図書館」まで作って、朝から晩まで、言ってみれば本に囲まれ、本と「共に生きる」生活を選び取っていますが、僕の生まれ育った家（すなわち、僕の郷里の両親の家）には、今でも本棚と呼ばれるものがありませんか。なぜなら、僕の両親には両親の、自分自身の生と死があるのであって、そこには単純に、本棚は無用であるからです。

僕自身は、すべての人が本を読むべきであるとか、すべての人が本を読まなくてはならないとか、そのようなお説教は嫌いです。本は、読みたければ、読めば

宜しいし、読みたくなければ、読まなければ宜しい。——ただし、本を読まないのであれば、本に代わって、自分自身の生き方と死に方を教えてくれる何かを、人は探し出さねばならない、と思います。

現在、僕の家の東隣には寺があり、いつも窓から、その寺の奥の墓地が見えています。そして、その墓地の上には山があり、その山の頂には、ちょうど今から百年前（一九一一年）に、夏目漱石が立っていました。その山の頂に立つ彼の姿が、今でも僕の目には見えています。そのように申し上げれば、皆さんは僕を奇人扱いして、お笑いになるでしょうか？

夏目漱石が亡くなるのは、それから五年後の出来事です。数え年で言えば、ちょうど五十歳で彼は亡くなります。しかも、その生涯の、わずか十年ばかりの間を、彼は、いわゆる小説家として過ごしました。すでに同じ一人の人間として、それ以上の時間を生き長らえている身には、いろいろ複雑な思いも去来しはしますが、それも含めて、自分自身の生と死です。

僕自身は、これから何年間、生き続けるのか、分かりません。けれども、僕も森有正のように、人間が「あくまで一人の在りのままの人間であって、それ以上でも、それ以下でもない」状態を目指して、生き続けたい、と思います。そして、その時には本が、いつも僕の傍らにはあるでしょう。再度、森有正の文章を読んで、終わりにします。ありがとうございました。

考えてみると、僕はもう三十年も前から旅に出ていたようだ。僕が十三の時、父が死んで東京の西郊にある墓地に葬られた。二月の曇った寒い日だった。墓石には「M家の墓」と刻んであって、その下にある石の室に骨壺を入れるようになっていた。その頃はまだ現在のように木が茂っていなかった。僕は、一週間ほどして、もう一度一人でそこに行った。人影もなく、鳥の鳴く声もきこえてこなかった。僕は墓の土をみながら、僕もいつかはかならずここに入るのだ

ということを感じた。そしてその日まで、ここに入るために決定的にここにかえって来る日まで、ここから歩いて行こうと思った。その日からもう三十年、僕は歩いて来た。それをふりかえると、フランス文学をやったことも、今こうして遠く異郷に来てしまったことも、その長い道のりの部分として、あそこから出て、あそこに還ってゆく道のりの途上の出来ごととして、同じ色の中に融けこんでしまうようだ。

たぐさんの問題を背負って僕は旅に立つ。この旅は、本当に、いつ果てるともしれない。ただ僕は、稚い日から、僕の中に露われていたであろう僕自身の運命に、自分自ら撞着し、そこに深く立つ日まで、止まらないだろう。

## ■ 付録

本（あるいは、書物）という名の付いた本の中から、今回は皆さんに選り抜きの好著（と、僕自身が評価する本）を、ご紹介します。いずれも僕が、これまで多大の影響を受け、これからも受け続けるであろう、本の数々です。別段、お読みにならなくても構いませんから、気が向けば図書館（「天野図書館」？）あたりで手に取って、ご覧になって下さい。差し当り、日本の本と外国の本を、それぞれ十冊程度、五十音順に並べておきました。

残念ながら、表題に「本」や「書物」という語が含まれていないもの（例えば市村弘正『読むという生き方』）は、基本的に除外せざるをえませんでしたが、逆に「読書」や「読者」や「図書館」という形で、どうしても取り入れたい本は無理をしても載せました。また、あえて戦前のもの（例えば三木清『読書と人生』）や、いわゆる読書術の指南書の類（例えば加藤周一『読書術』）は、今回は省略しました。ご寛恕を願います。

今福龍太『身体としての書物』（東京外国語大学出版社）

ポール・クロードル『書物の哲学』（法政大学出版社）

ダニエル・サルナーヴ『死者の贈り物——ひとはなぜ本を読むか』（同上）

バリー・サンダース『本が死ぬところ暴力が生まれる』（新曜社）

寿岳文章『本の正座』（芸艸堂）

庄司浅水『本の世界』（毎日新聞社）

菅啓次郎『本は読めないものだから心配するな』（左右社）

多木浩二『20世紀の精神——書物の伝えるもの』（平凡社新書）

鶴見俊輔『読んだ本はどこへいったか』（潮出版社）

寺山修司『書を捨てよ、町へ出よう』（角川文庫）

ジェラルド・ドナルドソン『書物憂楽帖』（TBSブリタニカ）

マシュー・バトルズ『図書館の興亡』（草思社）

樋口覚『書物合戦』（集英社）

福永武彦『書物の心』（新潮社）

ブリュノ・ブラセル『本の歴史』（創元社）

ヘルムート・プレッサー『書物の本』（法政大学出版社）

前田愛『近代読者の成立』（岩波現代文庫）

アルベルト・マンゲル『読書の歴史』（柏書房）

宮下志朗『書物史のために』（晶文社）

山口昌男『本の神話学』（中公文庫）

## ■ 新聞原稿（「本の死に様、人の生き様」）

最近、子供に向かって「本を読め、本を読め」と言う大人が増えているようで

す。巷(ちまた)には、よほど本を読まない子供と、本を読む大人が溢れており、そのような大人が子供の情けない姿を見て、ヒステリックな叫びを挙げているのでしょうか？ そうだとすれば、それは逆に、情けない話です。

本を読むことは、まず本という物体の、そして物質の、まさしく「もの」の成り立ちを振り返ることであり、その成り立ちの困難と、それにも拘わらず、その困難の上に咲いた花(すなわち、本)の美しさを褒め称えることであらねばなりません。何よりも、その本から私たちが受けた、多大の恩恵を。

そのような感謝を欠いた場所や、あるいは、そのような配慮を怠った場所では、たちまち本は臨死の時を迎えます。子供は本を開かず、見向きもせず、大人は本を裏切り、ひたすらパソコンに向かい合い、開いてもいない窓(window)から吹き付ける、生温かい風(wind)に目を傷めることでしょう。

人が単に、机に座り、筆を取り、目の前の紙に文字を書く、それだけの行為が神聖で、厳粛な、文字どおりに本来の、人の姿を刻み出し、刻み付ける行為であった時代に、本は生まれ、育ちました。そして、その本は困ったことに、私たちの時代に私たちの咎(とが)で、瀕死の病に臥せています。

子供に向かって「本を読め、本を読め」と叱るのは、容易です。しかし、そのような説教好きの大人になるよりも、自分が本当に、本と付き合い、本から「ひろがる」世界を自分の心の中に、外国の何処かや、この国の何処かではない、自分の心の中に、探し求めることが先決ではないでしょうか？

そして、その時、人は自然と人生の根源に辿り着き、自分の生と死の意味を知り、それを誰かに伝えることの責務を感じるでしょう。さらに、その時、はじめて人は子供から、大人になるのではないのでしょうか？ 本から「ひろがる」世界とは、そのような生と死の間(あわい)に「ひろがる」世界です。

(※)この新聞原稿は、二〇一〇年九月二十五日発行の『ニュース和歌山』に、ほぼ同様の形で、掲載されたものである。